



葉不
朗詠國字抄
三四



2nd

和漢朗詠集抄卷之三

秋

立秋

蕭颯涼風與衰髮。誰教計會一時秋。

蕭颯ハ秋風起負涼しく風と我老髮の衰ふと誰人々計會て秋の立と記一時の秋のありと云々計文集に同作

雞漸散閒秋色少。鯉常趨處晚聲微。

秋のそと一葉散れ作雞の庭にわきまの鳥紅葉す一葉庭小散ふも其比ハ初秋の景色少は一説ハ楓を雞冠

材云雞散すハ楓らと鯉常趨處ハ庭のそと孔子の子適生の歡小鯉を贈るありとて名は鯉とけけと家語にあり孔子庭に立

る前を鯉趨り過て詩をまら礼をまらと教らと云々論語に有れれ又ハ秋庭訓と云々云々ハ庭の葉ちる比ハまら秋風の音

秋
立秋

蕭颯涼風

與衰髮
誰教計會一時秋

ら秋

雞漸散
閒秋色少

鯉常趨處
晚聲微

後撰集より多人の詠ありしに
指當りしもの詞外はこゆる

後撰集より多人の詠ありしに
指當りしもの詞外はこゆる

清いあざやうとて
外はこゆる通りなり

秋まゆめめあざやうとて
風の音もぞあざやうとて

後撰集より多人の詠ありしに
指當りしもの詞外はこゆる

早秋

但喜暑の三伏に
隨て去とて不知秋
送二毛來

三伏の火氣盛んで秋の金氣伏かくる夏の部
三伏の終りに去とて秋の藩岳安仁秋貞の賦
を作文選に出其序に二毛の

月の過去て老の
來る秋をさぐる

月の過去て老の
來る秋をさぐる

桂花雨濕新秋地
桐葉風涼夜天

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

炎景剩残夜尚重
晚涼潜到簞先知

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

七夕

七夕

七月七日の夜牽牛織女の二星會すとして酒果
献し琴瑟吹つし針線はく多兒女詩歌の巧を

この後めつら寝ぬるわさの風ハ朝明の風ハ秋立てや
かくもや明方の風ハしと驚るるものなきハ助す

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

秋の日數いくまもかきま
夏夜もや厚重むとて
涼さハ簞が先知る
さくる敷をのとり是をわむ

憶得少年長
乞巧竹竿頭
願絲多

二星適逢未
別緒依依之恨
叙未五夜將明
頻涼風颯颯
之聲驚

露應別
珠空落
雲是殘粧
髻未成

風昨夜從聲
彌怨露明朝
及淚不禁

去衣浪曳
霞濕應行燭
流月欲消

月永圓

星香を焼拜する代乞巧類と云荆楚歲時記の牽牛は
河鼓星とて關梁河のほとり織女瓜果をつまむる又一説
小牽牛耕作代守織女の機績を守り績齊諧記の掛陽城
の武下とて織女河鼓牽牛の嫁とす又淮南子
此夜烏鵲河鼓填て織女渡りては是等の説實理
論も足す河鼓織女三星一座と夫漢代は是を相対

憶得少年長乞巧竹竿頭上願絲多
世の少年の行末長く態藝の巧さんとを憶得る其故
竹の竿の頭に五色の糸をゆぐる多きはついで思を和らげ男女の少年
詩哥のうけ文章の達せんを祈絲竹の音を績紡の業の巧人とを
乞ふ其奠也乞巧奠と云願の糸は婿ありて細をうくるを得るなり
二星適逢未叙別緒依依之恨五夜
將明頻驚涼風颯颯之聲
小野良材

二星小のよりて更の明んすを惜む題の詩序へ牛女の二星年の一度適
相逢て去秋より別離の心緒依依と愁思ふの恨を叙るは初更
のうら五更にゆる一夜が間もく明んとて朝風頻に颯々涼いん恨も
のこるに夜明けると驚く五夜ハ五更より颯々ハ風の音に依々文選の
露應別淚珠空落雲是殘粧髻未成
曉の露ハ二星別をわむ淚の珠の落る感朝の雲のこれむる
七夕の思乱とて粧も調残てうちびりる髻をんと星也露を
淚といひ雲を髻と云けり空と云字も眼目と博物志小鮫人と
水に住そのあり淵客とも云水中より出人家に宿りうらむ羅を織
巾に出して沽せり別のぞまに器をこひ位て珠を
出盤にまもつて是をわく去とあり淚の珠の故事也

風從昨夜聲彌怨露及明朝淚不禁
昨夜よりハ相見んと思ふより怨る心をやめるを云後江相公
明朝別るにわらび涙もあふれ風も露も天象の字を對とい

去衣浪曳霞濕應行燭浸流月欲消
七夕姫が婿て天の川を渡る題とて作る別と去る時の衣を浪を
曳てゆくる裳も天の河より朝霞をも濕る清る月の道をてす

月永圓

行燭まてしれが天の川の流る浸て
滄んとす皆川をこころいぬ

詞ハ微波に託して
且遣と雖心片月
を期して媒と爲と
欲

詞託微波雖且遣心期片月欲爲媒

七夕の云々すまき詞ハ天の川の微波に託して此方の岸より
彼方の岸言遣まど猶心中ハ七夜の片月の出るを期媒とて逢んと欲

て此川は遠まてしれが天の川の流る浸て

後撰集一うみ人あざと有とをいふらんかかれれども君がふめてハとあり
君ハ七夕をまき天の川の遠ま渡りぬかまもども君が舟出ハ年久く待ん
拾遺
むしせいにひとよとる七夕のあひらる秋れはなりけれ 雲之

あひらん秋のと有 一とせに一度ハとるに契かき逢瀬ハ千五年
うづりならまきぞもれりさ中なるとのあはれなり

古今
年どののあやハすれど七夕のぬる夜は教ぞすれりなる 紅雁

七夕のむし逢まはしり年ハ一むむらひ
いふ年ハうるともあふ夜のなまやと

秋興

秋興
林間に酒煖
紅葉焼石上に
詩を題して緑苔
を拂

林間煖酒焼紅葉石上題詩拂緑苔

仙遊寺より秋興の詩ハ林の間に酒を煖さんして紅葉を焼石の上
の緑の苔を打拂つ坐して秋興の詩を題 或云紅葉火の如く折焼ハ非

楚思淼茫雲水冷商聲清脆管絃秋

楚思淼茫
雲水冷商聲清脆
管絃秋あり

白居易江易左子の路めて黃鶴樓より秋の景色をかめ物あり 白
なる昔楚の屈原を流されを身の上比し作さるは楚客の思水沈
水廣して雲を浸すも樓より望物冷し景へ音商角徵羽の五音
商の聲を秋よ清脆の聲すみてまはし樓上に酒宴管絃をりて
心を慰まども秋の音あはれ

大底四時心捻苦就中腸斷是秋天

人の世に立大底春夏秋冬四時ともおかし事かよりて氣をいぢ
心捻苦すともあましも就中腸も断るをり思まらる秋の天なり

山望幽月猶藏影听砌飛泉轉聲倍

望山幽月猶藏影听砌飛泉轉聲倍
嵯峨法輪寺めて口号へ山の端へ入る月影藏一
新古今集よみ人まびきあり
小倉山ハ京西山あり

秋夜

秋夜長夜長無眠天不明耿耿殘燭
背壁影蕭蕭暗雨打窓聲

秋夜

秋夜長夜長無眠天不明耿耿殘燭
背壁影蕭蕭暗雨打窓聲
唐の玄宗皇帝楊貴妃を寵しあはれ後宮の美女をか貴妃了
都の坤ちりよまのまびにれ居て一生むく物思にあし
長恨歌の句ちや唐の玄宗楊貴妃に後物思いれい秋の夜も
長く宮中の鐘の音水漏の刻も遅々更けけの御曙近く星河が取々
白氏徐道時張尚書酒をすり電愛の舞妓時々と云
を出し張氏卒して後うたの燕子樓と云に彼時々
て十二年の春秋を送る白氏われこれ詩作より霜夜の月の
秋の夜がたに只我が身むらのそめ小長ひあつて

遲遲鐘漏初長夜耿耿星河欲曙天

遲遲鐘漏初長夜耿耿星河欲曙天

燕子樓中霜月夜秋來只為一人長

燕子樓中霜月夜秋來只為一人長

蔓草露深人定後終宵雲盡月明前

蔓草露深人定後終宵雲盡月明前

蒹葭洲裏孤舟夢榆柳營頭萬里心

明詠國寺抄

蒹葭洲裏孤舟夢榆柳營頭萬里心
柳ハ胡国に多し其旅營の日數を送り胡塞万里の外に都を思ふ旅人の心

高山表裏千重
の雪洛水高低兩
顆の珠

十二廻の中此夕之
好るに於勝るは
無千萬里の外皆
吾家之光を於筆

碧浪金波三五の
初秋風計會て
空虛小似り

自疑荷葉凝霜は
凝して早と人
道蘆花雨と過て
餘
岸白く還て迷
松上の鶴潭融て
算可藻中の魚
瑤池は便是尋常
の号此夜の清明ハ
玉不如

金膏一滴秋風の
露玉匣三更冷漢
の雲

楊貴妃歸唐帝

月永國之少

狸の遠く在て大方今夜の月と弄るらん心の内思つくと當意
有の依りて幽玄の句に二説に中秋最中年に二度の月を新月と云故人友

高山表裏千重雪。洛水高低兩顆珠
山大高しを嵩と云五岳の中岳を嵩と云月の光を嵩と云
山の表裏千重雪の降るに月光洛水に影をうつ高く空小く低
水に影をうつ兩顆の玉あるを王と云顆と云數のまのじ
洛水は京兆洛縣よりいづるをいふ

十二廻中無勝於此夕之好千萬里
外皆爭於吾家之光
習作各
紀納言

碧浪金波三五初秋風計會似空虛
十二回ハ十二月一年中に此夕の月の勝て好むに千萬里の外皆各
光を賞してこれに過て月の清さ知れずと思ふ 月十五夜の詩の岸に
秋の池澄て碧の浪ハ三五の初夜の月映し金の光波ハ空に
秋の風冷やうりる計會せて池水が空虛と云ふと此詩下に過て一律に

自疑荷葉凝霜早人道蘆花過雨餘

前の詩三四の句に他の荷葉の月の照るより早く霜の凝るると疑
蘆の葉に映する草の花の雨の後に散餘ると云ふ草花白くは月を云

岸白還迷松上鶴潭融可算藻中魚

前の詩五六の句に池の岸は月の光白くして松の上は白鶴が居る
と云ふ潭は底まで月影を透して藻に住魚の數も算ふべし

瑤池便是尋常号此夜清明玉不如

前の詩の落句に是を尋常と云ふ七言律一章に崑崙山の邊に池あり玉後
瑤池と名づくこれとも尋常の玉と此夜池水は月のまじり玉も及ぬ

金膏一滴秋風露玉匣三更冷漢雲

秋風は露の滴落る月の鏡を磨金膏の雲を磨く三更の空に音三品
月は掩る雲の鏡を磨く玉の匣は冷漢の空を云玉の夜は詞

楊貴妃歸唐帝思李夫人去漢皇情

卷之三

六

八

月永國之少

の思ふ夫人去く
漢皇の情

月

誰人隴外久
征戎何處
庭前新別
離

秋水漲來
船去速
夜雲收
盡月行
遲

黔中に醉
不
去得
麻園山
月正
蒼蒼

明詠國字抄

卷之三

雨夜の月を戀題として作之弘農の楊貴妃と云ふは
高力士唐の玄宗の後宮にすし楊貴妃とて帝の寵愛限り
兄楊國忠丞相の位鼻國政をぬきりて民怨怒して終に大乱と
時に安祿山といふの楊國忠を討し偏長安の都に
死せしむる蜀(洛陽)馬嵬原に陳元禮帝の馬前に伏し
貴妃をぬり民の怒を休んとせむを帝力も高力士に命
貴妃殺せしめし落行ふも事去時つらに從ひ貴妃の
ひ中一節物に心をこめし歸の字に人死をば土に歸す
李延年が李夫人漢の武帝の恩寵深し病に罹りて卒す
歎のあまり畫工の作し形は画に反響を燒て其魂を招
悲ふる雨夜の月を戀似し思
云情と云戀の意

拾遺
水の面にてる月も
秋の夜中より

二月の夜中より
水の面にてる月も

月

誰人隴外久
征戎何處
庭前新別
離

隴外胡塞之都と胡よるる隴山ありて城を築き胡國
都を伺はんとする守む此ありて隴外と云今宵月明
誰人萬里に軍兵を帥來て戎を征す都を思はん又
の處にて今夜の月に新に別離て袂をふる處もあ

秋水漲來
船去速
夜雲收
盡月行
遲

東方に歸る船も汁水をこるる秋の水満て船速く月の
雲間ある空を轉するも夜深雲收て快晴の空に月が
所あるとて行と遅
よと思えり

不
醉
黔中
去得
麻園山
月正
蒼蒼

蕭處士が黔中小遊び行を送る詩黔中と云其處巴峽の江
水字は平陽の猿の斷腸の聲あり酒を過し西すんばむ
歸去ん抑も麻園山月之光蒼々として出ん景物の
少うを云白氏文集第一の詩と云全篇七言律

卷之三

火

九

三

天山不辨何年雪
合浦應迷舊日珠

禁庭の月はながめて作る胡国の天山は四時に雪消す年を
績で降重もどつぬかむ潔白雪は降るもりの年の雪とも
つり月は雪にみかへる合浦と云ぬ良吏入来て政事善も濱
小珠より来り酷吏在て政事悪も珠を去て交趾縣といふ
る後漢書いふなり孟嘗君字伯周合浦の太守なり其地耕作
珠を取る産業と然るに先の太守貪残ふ珠をとりてかり
一政正はあ珠もくもく来りし今月の光を珠のどくか
去る珠がのるなりか迷ふもくもく舊日の珠と作せり

欲和豊嶺鐘聲不其奈華亭鶴警何

豊嶺の鐘の聲よ
和んと欲も古其
華亭の鶴の警言
奈何

山海經に豊山に九鐘あり霜降れば和て自ら鳴嶺と云
云じ月の光霜に似る小鐘和するや不しく又遠城に華亭あり鶴
来てとまもく射んとする小空中に声して丁令威家去て千年
来て今より来ると鶴の鳴る神仙傳に出又千年の鶴霜降る時
飲て鳴すとある也敬言と云月の光の霜も華亭の鶴の聲は警
るやいふわんとこのころなり此詩夜月秋霜に似るといふ題を作

郷淚數行征戎の
客棹歌一曲釣漁
の翁

郷淚數行征戎の客棹歌一曲釣漁の翁

天のもゆりこむるまよひの山お月も
安倍仲實元正天皇の宝龜二年八月遣唐使に同船し學文のたわふ
入唐す唐の玄宗帝の時留學の後日本へ歸ると明州の津小巖の時
彼国の文は友餞て詩章は贈折じ海彼に月一のちる城なりとある
天の原に空へいかに書を原し云なりゆり仰を遠くひんらと云とまをり
さくさく三笠山春日と和州南都より万里の外まですさくさく面白
月おゆり仰を奈良の京かどよとる月心おゆりかく詠くも附字
古
あつ雲にものちしほお月かすさくさく秋の原に月 郊外

古今集ハハ人志のびくす両説あるハ一首の哥とも云月のさやる
雲井とく飛尸の數まゝふにんゆり

九月九日 付菊

燕ハ社日ヲ知テ巢
を辭して去菊重
陽の爲に雨或肩
て開

故事を漢武に於
採む則赤莢宮人
之衣に挿す舊跡
を魏文に於尋り
亦黃花彭祖之術
を助

三遲に先て吟其
花を吹曉星之
河漢を轉ず如
十分に引て吟其
彩を蕩せ秋雪
之洛川に廻ると疑

谷水洗花を洗下
月永國三少

拾遺
よにふもどおぢやう一かられどもにいくびぢはつらん

拾遺集ハ世ハ多しとありこゝのハ助字ハ浮世の多し物思も
あはれども月に感情のあはれ幾度か詠らん物想入月うち眺むとするを云

九月九日 付菊

續齊諧記云汝南の桓景昔長
房ハ長房ハ九月

九日ハ家災ハ災家人ハ
上にも高に小登て菊花酒を飲め此禍消さんと云家こ
て奇異ハ感せし是より重陽ハ山に上り茱萸菊花酒を用ると

燕知社日辭巢去菊爲重陽肩雨開

二八月の中氣を春分秋分と云其の逆ハ日社日とす年
兩度あり此日ハ秋の神を祀の名ハ燕ハ春社の比來り秋社の比巢を辭く
去ハ九ハ極陽の數月と日と九を重るの重陽と云菊ハ此日ハあまんとて
雨を肩帶て登ると云けり此作者官を辭する志ハ燕莢ハ時を知感

採故事於漢武則赤莢宮人之衣

尋舊跡於魏文亦黃花助彭祖之術

群臣に菊花を賜を題する詩の序ハ今禁中九月九日茱萸を
挿むて行ハる其故事を追ハむハ漢の武帝宮人の袖ハくハせられ
るとハ始西京雜記に出る茱萸和名多比つ其實赤ハ赤莢
とも云魏の文帝九月九日鐘繇と云臣に菊一束ハ多し書に謹奉一束以

助彭祖之術と彭祖菊を服して壽祿保七百歳也て容貌十七八歳の
と云と列仙傳ハ出此旧跡ハはる今も群臣に菊花を賞ハ黄花を賞

先三遲兮吹其花如曉星之轉河漢

引十分兮蕩其彩疑秋雪之廻洛川
上と同ハ序文ハ蓋ハ酒をうけ三三ハ三三ハ遅る時飲然せれば藥ハ
故に酒ハ三遲とも云孟ハ黄花を泛回て遅らざる先に吹花の旋ハ
の星の河漢に轉るやハ酒ハ十分ハ引くハ白菊の動く色ハ時
ハ秋の雪洛川ハ廻るハ伊洛川ハ唐の大河ハ黃白ハ屋雪ハ喻

谷水洗花汲下流而得上壽者三十

流を汲而上壽哉
得者三千餘家
地脈味を和す日
精を食而年顔を
駐者五百箇歳

餘家地脈和味。食日精而駐年顔者
五百箇歳

是も同一序之南陽鄧縣の谷水甚甘山上菊花多きを洗落せる水也
或下を其流の末に二十餘家あり邑人此水飲めば長壽なり
苑山上壽百二十年中壽八十年下壽四十年之地脈公藥之劉生と云仙
人白菊花の汁蓮花の汁地脈の汁を丹小和蒸服すると一年つお五百
歳保仙方是を日精と云り年老て顔色衰きを年顔駐と作り
又いづく菊花を日精といひ菊根を地脈といひ仙家の服せし處
拾遺

前の序文小註も鄧縣の谷水飲て壽得る故事之も宿の菊の露
幾垂つりてうかの谷水のてく淋とらんといふことあり

菊

和名加波良與毛木
日精草ともいふ

霜蓬老鬢二分白露菊新花一半黃

霜蓬の老鬢二分
白露露菊の新花
半分黄より

不是花中偏愛菊此花開後更無花

是花の中に偏に菊
を愛するはわづらひ
花開て後更に花無
きことあり

嵐陰欲暮契松栢之後凋秋景早移

嵐陰暮と欲して
松栢之凋の後
契秋景早移て芝
蘭之先敗を嘲

嘲芝蘭之先敗

鄧縣村閭皆潤屋陶家兒子不垂堂

鄧縣の村閭は皆
潤屋を陶家の
兒子不垂堂せ不

紀納言

黄菊一叢咲金を散せりてと云題之鄧縣公菊多記也
村閭富家と云と云之菊花金と云と云之屋を潤す人富を云大徳の語
明永國史抄

蘭苑らんえんの自慙みづから 爲な俗骨よくこつ 長生ちやうせい有あ不信ふしん 不な

蘭蕙苑らんゑんの嵐あらし 摧くだ後蓬萊洞くわいばうらいどうの月霜げしやうを照て中ちゆう

陶淵明たうえんめいの東籬とうせきに菊きくを植うて愛あいせし無堂むどうハ堂どうに上のぼり危あや事ことをす備夫びふの取業しゆぎやうを云古語こごに千金せんじんの玉たま垂堂すゐどうせず良淵明りやうえんめいの家いへの兒こ子こ六危業ろくあやハ也

蘭苑らんえん自慙みづから 爲な俗骨よくこつ 慙みづから 籬せき 不な信ふしん 有あ長生ちやうせい

蘭らん草くさの中ちゆうの仙人せんじんを題だいし仙家せんかに仙相せんさうと金骨きんこつと云いふ也 蘭らんの苑えんハ枯くやく我身わがみの俗骨よくこつハ慙みづから慙みづからのつゝを云いふ也

蘭蕙苑らんゑん嵐あらし摧くだ後蓬萊洞くわいばうらいどう月霜げしやうを照て中ちゆう

蘭蕙らんゑんの此系こけいを秋あきの嵐あらし摧くだて散ちせられ菊きくハ蓬萊ばうらい仙人せんじん洞どうの花はな 菅三品かんさんひん

久堅くけん雲うんといふ批詞ひし雲うんの上のうへ殿上てんじやうに上のぼり弄あそぶハ菊きくを卑眼ひがん空くうの星ほしと見違みちがふ

初霜しゆしやう白しろく置おきまがへる花はなやん霜しもやん心當こころあたに推量おしりやうと

九月盡くがつじん 縦たて嶠じやう函くわんを以もつ固こと

九月盡

縦たて以もつ嶠じやう函くわん爲な固こ 難たが留とど蕭瑟しやうせき於を雲衢うんこ 縱たて

今孟賁こんもうへん賁へん而追お 何遮なにせ 爽籟すやうさい於を風境ふうけい

頭目かうめ縱たて隨したが禪客ぜんかく乞こ 以もつ秋あき施せ與と太應難たいおうたが

文峯ぶんぽう按お轡せき白駒はくこ景けい 詞海しかい艤舟ぎしゆ紅葉こうふ聲こゑ

我わが頭目かうめハ禪ぜんを修しゆむ文ぶんの乞こ望ぼうハ任にんせむ秋あきハ惜おぼしむ施せ與と禪ぜん

是こゝハ九月くがつ盡じんの日ひ佛性ぶつじやう院いんを秋あきを惜おぼ詩しの序しよなり

雲衢うんこハ過行かかう秋景色あきけしきの蕭瑟しやうせきハ高秦かうしんの嶠じやう函くわん谷やの二にの關かん固こて

牛うしの角かくをぬく剛力かうりき依よりて追おひむと去い行かう秋あきハ也なり

孟賁もうへんハ人ひと而追お 孟賁もうへんハ人ひと而追お 孟賁もうへんハ人ひと而追お

何なに遮せ 何なに遮せ 何なに遮せ

白駒の景詞海に
舟を舣す紅葉の
聲

秋いまだ詩境を出ずと云を題しり海山越て去行秋の白駒が以言
文成作る峯の響を按て景成る秋風小散紅葉の詞の海の舟を
舣して秋を乗去んとす漕出らぬさる大峯詞海詩境を云魏豹
が傳ふ人生一世の間白駒の隙を過るしとあり大江以言紀齊名二双の
文士は齊名詩霜花後垂詞林曉風葉前駈筆駈程と云以言
詩文峯按響駒過景詞海舣舟葉落聲と云いま合せず密
小六条宮具平親王の來て申合らる言のさめく白の字有りと以言
きて白駒紅葉に直一秀句成て勝り齊名聞て言を恨奉らるが
病を受けて限及べる時宮より詠さる命恩之至悚恐千廻
御白之字忘却せずと云文士道を執せりかくのどーといふ

風雅
山さび秋を重ぬとくも枝の葉下にをるお糸 千里

風雅集よ山寒とあり山中の寂に楨の葉にあゝの
霜のく秋の尽る代告はどーとあり

拾遺
くもさび秋のかさきにくもものハ我のやゆいのをたてある系燈

ゆめみの霜、白髪を云星霜つらうとて首も白くわらハ
秋のく々紀念とて源重之消息と尋らる返事あり

女郎花

白氏文集本蘭花と題す詩に應添
樹女郎花とあり和名集新撰万葉小云
女郎花和名云女郎之乎美那閉之と
わり文集の女郎花と同物なりと云

花色如蒸栗俗呼為女郎聞名戲欲

契偕老恐惡衰翁首似霜

古
なまむらちやうる響也にやもせわやれらこのかたなまむら

新古今
仇の石はたれら石はまハ立ん

なまむらちやうる響也にやもせわやれらこのかたなまむら

御母なり ○此哥伊勢の集ぬをあり和歌ハ二人同吟するもの多し

女郎花

花の色ハ蒸栗の
如俗呼女郎と為
右を聞て戲小偕
老契契んハ欲れ
恐ハ衰翁の首
の霜に似らる代惡
んとせ

萩

曉露に鹿鳴花始發百般攀折一時の情

萩

字彙王篇等に萩蕭蒿同種也蓬の類なり揚氏漢語抄に鹿鳴草あり今萩を是に用ひ和訓

異朝ハ萩ハよりの類ハ万葉小樹の字もたに國史ハ芳宜草とあり萩の和名波木鹿鳴草用來せり

曉露鹿鳴花始發百般攀折一時の情

新撰萬葉集の詩萩に鹿鳴草の字あり曉の露に鹿鳴の花發せりて秋の千草の中にて此花の美に於て百般攀折一時の情

拾遺 秋の野に萩ふもてかき枝れはるるなりそのまひてを思ふ

拾遺集に小波岡にたりぬるや萩とて詩に萩川夫が結句纏かれば枝を流さるるを思ふとすよここしり強て説くはるるを思ふ

花の散るる色ももくはらうらふと云ふも思ふに折るるに露の置るるも思ふも思ふに程といふも思ふ

萩の錦ハ古郷(もろ)一植(さ)鹿の妻問(こ)声(こ)うらふま(と)とを思ふ

萩の錦ハ古郷(もろ)一植(さ)鹿の妻問(こ)声(こ)うらふま(と)とを思ふ

蘭

紫に白の二草一草詩家蘭用和歌ハ兼用又ハ春蘭夏蕙秋芝冬菴の別ありと云

前頭更有蕭條物老菊衰蘭三兩叢

前裁の頭秋の杪物の景色も蕭條菊も老蘭を衰るに三叢かよに兩叢あてり。叢ハくさきつと訓也

扶来豈無影乎浮雲掩而忽昏叢蘭豈芳乎不乎

豈不芳乎秋風吹而先敗

一物集に出る菟衣賦之魯の隱ハ菟衣と云処を管て老を以て左傳に出前の中書王ハ延喜の御子ハ天曆の御弟ハ兼明親王ト申左

大臣の進忠節は尺の寸も小野宮関白清慎公邪佞して諛言をかま
親王と世の政は自專の親王は隠公の如く龜山の麓に山莊を
營のひる弥羅口の爲の龍居のひの憤の餘此賦は作相の置置の
りる薨去の後世に弘美層敷覽あるに君昏臣諂と云句に至て悦せの
投置と一が扶桑豈影るらんやと云を御覽に大に洋を流るひの日は
扶桑の林より出ると云ふぞ扶桑は日の名に假用日の影は明らかと云
掩ふる昏く君明らるるも安臣あつて聞かず蕞蘭芳一と云ふも秋の
風吹かぞ先敗る忠良の人諛臣の口に傷るるを喩とす

凝如漢女顔施粉滴似鮫人眼泣珠
曲驚楚客秋絃韻夢斷燕姬曉枕薰
蘭の花紅の露凝て花に點する漢王 都良香
宮中の美女が紅白粉を施るに露の滴鮫人の詩浪の珠を盤に充たせり

曲驚馬て楚客の秋
の絃韻夢斷ては
燕姬が曉の枕薰り
松樹千年終は是
朽槿花一日自爲榮
爲

來而留不薤壠
有拂晨之露去而
返不槿籬暮之
花無

月永國を少

大臣の進忠節は尺の寸も小野宮関白清慎公邪佞して諛言をかま
親王と世の政は自專の親王は隠公の如く龜山の麓に山莊を
營のひる弥羅口の爲の龍居のひの憤の餘此賦は作相の置置の
りる薨去の後世に弘美層敷覽あるに君昏臣諂と云句に至て悦せの
投置と一が扶桑豈影るらんやと云を御覽に大に洋を流るひの日は
扶桑の林より出ると云ふぞ扶桑は日の名に假用日の影は明らかと云
掩ふる昏く君明らるるも安臣あつて聞かず蕞蘭芳一と云ふも秋の
風吹かぞ先敗る忠良の人諛臣の口に傷るるを喩とす

凝如漢女顔施粉滴似鮫人眼泣珠
曲驚楚客秋絃韻夢斷燕姬曉枕薰
蘭の花紅の露凝て花に點する漢王 都良香
宮中の美女が紅白粉を施るに露の滴鮫人の詩浪の珠を盤に充たせり

松樹千年終は是朽槿花一日自爲榮
放言の詩にてやいへまの云々松小千年槿契を衰朽期 白
かたわらびきく槿のたれきも一日の榮て事足て死をも憂は
生をもいとむい生死して紅の世我身又
幻之衰樂は世を必とすべしとる意

來而不留薤壠有拂晨之露去而不
返槿籬無投暮之花
前中書王

願文無常の句へ薤露萬里と云句齊の田横がけり人を送る挽
歌にあり蒙求に出るに云々ハ生來一人も留らざるハ薤乃

檻に於て晨の露のどく下を去る人の返る

もつれあきとらん秋をいばるまのちの秋の道
中將

新勅撰よみ人あはれ 薜を人の願ひて朝露の聞かま
くハ誰ともちりがくはつらうとよめる

切なげははるばるとあらん人ほも花のさあさるあ同人

拾遺集哀傷の部に思ひんあり人の紅顔忽白骨とる
人か薜はえを思ふとく又花もささるあらんこころささる

前栽 庭の前へ樹本草花を

多見栽花悦目儔先時預養待開遊

秋の花を栽を願ひ多く世の花は愛を人ぞるに
其時々に先かみて前より養培はて花は待預まふとる

自吾閑寂家僮倦春樹春栽秋草秋

社に連て幾句章閑寂ひたより暮居る家僮も倦不性同
成るより春の樹春栽時先より養て花もささるあらん

閑思着汝花紅日正是當吾鬢白時

梅の實生を花待久に梅は植紅の花盛る人日あんと
思ひあてせは鬢白髪生ずる時にこそ當ん汝と今栽樹は

曾非種處思元亮為是花時供世尊

菊の苗植る詩陶淵明名は潜字元亮菊は愛せり今此
菊は栽るかの元亮は思ひ我も愛せんよめば花は待親尊供

りつをばるばるをばるばるをばるばるをばる

隣り床蓆の花をそれ惜てよみあはれ思ふ厭ふ相床をみは
床に塵は掃を清浄ともり此花は妹とかがとく愛するは

塵はばるばるをばるばるをばるばるをばる

よかにうらむをばるばるをばるばるをばるばるをばる

原本
作養

三秋而宮漏正
長空階雨滴萬
里而鄉園何小
在落葉窓窓深

秋庭拂不藤杖
携蘭小梧桐黃葉
枝踏行

城柳宮槐漫搖
落落秋悲貴人
の心に到不

梧桐影の中に
一聲之雨空灑
鷓鴣の背の上
數片之紅葉總殘

樵蘇往返杖
朱買臣之衣
隱逸優遊履
葛稚仙之藥踏

三秋而宮漏正長空階雨滴萬里而
鄉園何在落葉窓窓深
張讀

秋庭不拂携藤杖閑踏梧桐黃葉行
閑居の詩に詠人かく庭を拂さず藤の杖は曳て黃散る百
拾桐の葉を踏行ありのまの作意梧桐諸樹先づちて落葉は

城柳宮槐漫搖落秋悲不到貴人心
早且の帝城に至り王氏の僕射日本の官に送る貴人の
と此人をさして云ふ都城宮槐の柳槐を漫に搖落せとも貴人の心は

梧桐影中一聲之雨空灑鷓鴣背上
數片之紅葉總殘
順

梧桐の葉の落る雨一ちり降來る聲小似て實の雨も空灑
といえり鷓鴣と云鳥ハ日向以南に飛霜をいそぐ冬之夜ハ樹の葉
を背小覆て飛と雀約古今註いそぐ其背小ちる數片の紅葉
の殘て樹ハこれ散落をいそぐ作り神泉苑て葉落風枝疎序

樵蘇往返杖穿朱買臣之衣隱逸優
遊履踏葛稚仙之藥
高相如

樵蘇山路を往つ返つ木を樵てわさ錦を杖をりて穿と朱買
臣字ハ翁子會杖音に住て家貧く書を好新を履か讀り
竟に漢の武帝に仕侍中より會杖音の太守小する帝のさま富貴
かく故郷へくさる錦を着て夜行じとこの由に彼衣杖のつて
錦小れとる隱逸とて世を逸山に隱さる人紅葉落散る杖
踏て優ちる遊戯を履其履ハ丹藥をふむとあると云葛稚仙ハ仙人

嵐に隨落葉蕭瑟を含石に濺飛泉ハ雅琴を弄す

夜を逐て光多吳苑の月朝毎に聲少漢林の風

満る秋題も詩の序に撫蘇隱逸山中夜と藥ハ落葉の色也云

隨嵐落葉含蕭瑟石飛泉弄雅琴

山の青紅葉小涼變水も落葉小色変る題

山に紅葉散す秋の嵐の蕭瑟含つ樹葉が飛び石に流濺飛泉の音

雅樂の琴は彈するの似より上の瑟の字空取と云琴の類也琴瑟相對せり舒氏の女音樂好く新を採に行やぐ坐して動けて泉と

やう人其泉のやうく絃哥と云泉涌流と云故事と云泉小琴哉より合せて舒姑泉の文選の註に出る上の句は山下の水を云

逐夜光多吳苑月每朝聲少漢林風

旧に暮落葉も題吳王の苑の梢が疎らるる月の光が夜を逐て多も漢の上林苑の木葉散に隨て朝毎風の聲少

新古今 わまらう 紅葉もあざうりてのいれ秋のやみぢぬ 人丸

大和国飛鳥川の水上下葛城山ありかの山に秋風吹て紅葉散るに

あや此川に流る來るも古今の

かみれ月を夜とさのいひのあはれはあはれぬ

後撰集にもみ人志げ 神南備森林和州の岩所

時雨ととの森の木葉が落散る雨のあはれ

古今 さんくもあざうりてのいれ秋のやみぢぬ 人丸

深山の紅葉誰人もあざ散る意

又前にも出る朱買臣が錦を着て夜行と云故事

雁 付歸雁

萬里人南去三春鴈北飛不知何歳

月得與汝同歸

唐の玄宗天寶の末楊国忠丞相の

鳳儀征む行との万人に一人も歸り得ず是は萬里人南去と云

わう第三の春三月の比雁北に歸る期あとも南に

むのいゝ人い何の年月北に歸來らん其期もあとも

雁 付歸雁

萬里人南去三春鴈北飛不知何歳月得與汝同歸

唐の玄宗天寶の末楊国忠丞相の

鳳儀征む行との万人に一人も歸り得ず是は萬里人南去と云

わう第三の春三月の比雁北に歸る期あとも南に

むのいゝ人い何の年月北に歸來らん其期もあとも

潯陽の江の色、潮
添て満、彭蠡の秋
の聲、鴈引來

四五朶の六雨に
粧る色、兩三行の
雁、雲に點ど、秋
なり

虚弓、避難未疑
於、抛未、奔、箭、迷
易、猶、誤、を、下、流、之
水、の、急、を、成

雁、碧、落、に、飛、で
青、紙、に、書、一、隼
霜、林、に、撃、て、錦、機
を、破

碧玉の粧、笋斜立
の柱、青苔の色、紙
小數行の書

雲衣、范叔、が、羈
中の贈、風櫓、ハ、瀟
湘、浪、上、の、舟

月、永、國、三、少

潯陽、江、色、潮、添、満、彭、蠡、秋、聲、鴈、引、來
潯陽に江あり其水潮の添時、添満、彭蠡湖の名、湖水のうを鳴る雁が秋聲を引て來る

四五朶、山、粧、雨、色、兩、三、行、雁、點、雲、秋
四五朶の山に出る雨の赤葉、杜荀鶴、一、色、を、粧、雁、の、渡、を、兩、行、三、行、雲、を、點、る、と、秋、を、

虚弓、難、避、未、抛、疑、於、上、弦、之、月、懸、奔、箭、易、迷、猶、成、誤、於、下、流、之、水、急
雁の渡、小、秋、を、識、詩、の、序、に、空、飛、雁、上、弦、月、を、思、ひ、去、ん、と、し、七、八、日、比、半、月、を、弓、と、見、る、と、實、の、弓、を、後、虚、弓、と、上、弦、を、上、下、弦、に、比、せ、る、の、疾、落、來、る、奔、箭、を、下、流、に、水、と、云、雁、の、急、流、を、箭、の、奔、來、る、と、思、て、

雁、飛、碧、落、書、青、紙、隼、擊、霜、林、破、錦、機
碧、落、に、雁、の、つ、ら、り、飛、ハ、青、紙、に、書、く、に、以、て、隼、が、霜、の、林、に、撃、つ、た、れ、錦、機、を、破、る、と、

碧玉、粧、笋、斜、立、柱、青、苔、色、紙、數、行、書
雁、の、空、の、み、ど、り、に、色、を、以、て、碧、玉、と、粧、ハ、笋、の、柱、に、斜、に、立、つ、た、れ、又、繪、具、の、青、苔、を、以、て、色、紙、に、數、行、の、書、き、

雲、衣、范、叔、羈、中、贈、風、櫓、瀟、湘、浪、上、舟
賓、雁、故、人、に、似、て、と、云、題、に、春、去、秋、來、る、の、故、相、知、る、友、に、と、云、雲、衣、ハ、范、叔、に、似、て、范、叔、字、叔、魏、王、に、仕、須、賈、の、詩、に、と、云、後、秦、に、入、り、相、見、る、魏、王、須、賈、使、を、秦、に、至、り、范、叔、と、輕、の、賦、に、と、云、故、人、ハ、雁、を、故、人、と、云、題、に、雲、ハ、范、叔、の、羈、中、に、贈、一、衣、と、云、風、櫓、ハ、風、の、吹、時、の、櫓、瀟、湘、ハ、水、の、名、楚、の、屈、原、が、吟、み、湘、水、に、棹、君、三、閨、の、大、夫、に、あ、さ、と、云、漁、父、原、が、故、人、と、云、意、を、詩、江、の、上、を、雁、の、鳴、渡、折、と、舟、の、來、る、を、漁、父、

卷之三

秋

七

古今
秋風さらけりものぞもよもよあるたぐはきとてかみりてらん友列

初丁の空に聞ゆるハ誰ダ言傳の王章をくけり來にぞと云 雁書と云
丁の行列ウ文字ハ似るより云云云丁の足跡城入て文字城製とも云
より丁小王章をとり又蘇武匈奴に囚て十九年の後漢の使者至り
て武丁て成問ゆるハ偽て死せりて又ハ時に常惠といふもの俱いそ
なも胡地にありし使者にやえ漢の天子上林苑を雁を射多ひる
其足に書けり武丁帛書ありいして死せんと云せりるハ胡国其誠思
の感ゆる知るもあらんハ驚き謝りて蘇武を遣りて漢書を出さる
元朝の郝經字ハ伯常宋主に捕りて歸雁の足に帛書をかけ故郷に

歸雁

山腰歸雁斜牽帶水面新虹未展巾

山の腰に歸雁飛つるハ斜に帯を牽るも帯と云んとて腰と 都在中
云る水の面に新虹起初る虹未短く巾を展らるるハ面のまをけ巾と作

まを展らるるハ虹をさすハ虹のたよりをいすもさるる 浮城

遠山に霞れ引りやう花も咲くを見捨てるハ花も咲ぬ里に住らるる
くハ雁の歸る方ハ北海万里四季をこるハ常住枯色るハ常世と名

虫

切切暗窓下 嚶嚶深草裏 秋天思婦

心。雨夜幽人耳

切々ハ虫頻鳴るり嚶々ハ虫の吟ずる声詩の州中ハ出暗窓の下深
草の裏ハ虫のすく哀なる秋の天ハ夫を思婦の心雨夜の閑らるる幽
居する人の耳ハ左ハ地を
くん。白氏文集ハ幽を愁ハ作

霜草欲枯中思苦風枝未定鳥栖難

霜枯の庭ハ啼虫の音秋の限ハ思ハ切に苦ハ悲ハ聞ハ暮ハ秋の白
風ハ枝ハ吹ハ定ハるハ鳥ハ棲ハをトハめるハ

床嫌短脚葦聲鬧壁厭空心鼠孔穿

霜草枯んと欲
て中の思苦るり
風枝未定未鳥
の栖難

切切暗窓の下
嚶嚶深草の裏
秋天思婦の心
雨夜幽人の耳

床嫌短脚はして
月永國を抄

蝨の聲聞くと壁
の孔穿して鼠
の厭空心して鼠

蝨の脚の短きゆ嫌ふ其下に蝨の鳴かまひけしやゆへ壁
心の空かちりやわし鼠が孔を穿て風通りて寒は厭ふ
野相公

山館の雨の時鳴
自暗野亭の風

山住も館小雨の時蝨の聲やのう小聞へ空木立地草直幹
さかり合て暗らもバ鳴知ささるる野辺の草亭風の吹れ蝨の音も
これが寒くささるるかの虫なく時機を織み似たる形あり
一説に暗と雨夜の意寒と秋の夜寒をいふとぞ

叢邊怨遠と風
の聞暗壁底吟幽

叢の邊に蝨が秋のうを死せる声はく風にしひ暮くゆのう一順
聞へことごとくぬを暗と云壁の底に吟ずる声幽い聞る比夜もや寒く
月の色もゆるる蝨の寒くわらふまてて家小近まてて詩の幽風に
七月廿野八月在宇九月在戸十月蟻蟀入我床下とある是く
今こんと注たのめん秋の夜はあはれまの虫のなく
原本作
者名欠

かして月の色寒

今こんと注たのめん秋の夜はあはれまの虫のなく
原本作
者名欠

蒼苔路滑僧
歸寺紅葉聲

蒼苔路滑僧歸寺紅葉聲乾鹿在林
雲林寺に宿して作る山寺の路岩根の蒼苔滑るまよりの
往通ふ人も希むる僧が寺に歸る寂し紅葉散敷林の鹿鳴て聲は乾

鹿

鹿
さうくすいさかりたぞ秋の夜の娘さうくすい我ぞよまされ
古今集に藤原の忠房の歌に秋の夜寒にさうひ怨まらるる声あて切か
わく蝨さう我こそ長夜の明しうた思はまされと上のか助まらるる
はらくれ
あり

暗遣食萍身
色變更隨加草

暗遣食萍身色變更隨加草德風來
延喜の御時肥後国より白鹿は紀言を召紀言
吉凶を問ふ時奉り詩に詩か吟々鹿鳴食草之草とあるかむらけ
萍草は食身鹿の暗はるる色を變ずる白なる論語に
君子之德風と云を取て草も偃君の徳化の風が隨て遠方より來

德風來

德風來
君子之德風と云を取て草も偃君の徳化の風が隨て遠方より來

明永國

明永國
七三

白鹿の至り吉瑞なるを述り周の白狼の瑞を得て王に高貴
 刻漢に黃龍の祥を得て石の泰山に彫日本に白雉白鳳出吉瑞なり
 拾遺
 りみぢせぬとてのこいにしほ鹿とてのこむるや秋のまゝん
 常盤山ハ山城国大峯の北ありとて常住不変のてしむる
 せぬとてのこむるや秋のまゝん
 ももまん
 とるり

可憐九月初二夜露似真珠月似弓
 露
 小倉山大井川のむらぎ亀山にづく城州の聲ももちかき秋來らん
 以月夜上旬の月をぞうらねを小倉かきけんそめもくもくもく
 露

露滴蘭叢寒玉白風街松葉雅琴清
 蘭叢の叢に置露ハ王を貫て漸寒く松に吹風ハ琴の調子
 の清じ雅ハ雅頌雅樂風雅と云ふ同正立一本に街松葉ハ作
 新古今
 こちのわさつをのわさつ秋のむらぎとるり
 新古今集よりあつたつ野辺のあり小野鹿を鹿のこむる秋の花
 鹿の妻といふて男鹿のこむる花のあつたつとるり
 霧
 陰陽怒て風よりきて雲とるり又霧ハ百邪の氣
 陰陽犯地にのりて天小行る霞似て異なり

竹霧曉籠街嶺月蘋風暖送過江春
 疾亮字ハ元規と云人の南樓より曉の景色を望む
 窓に植置る竹の葉ハ霧立りて峰に傾く曉の月を龍ハ
 蘋風ハ遠の風江の江に過行春を暖る風ハ送ると云意下の句ハ春

雖愁夕霧埋人枕猶愛朝雲出馬鞍
 夕霧の人枕を埋
 を愁と雖猶朝雲

露
 可九月初三の
 夜露ハ真珠に似
 て月ハ弓に似たり

露蘭叢に滴て
 寒玉白風松葉
 を街で雅琴清

霧
 竹霧ハ曉嶺に街
 る月を龍蘋風ハ
 暖かくて江を過春
 送

夕霧の人枕を埋
 を愁と雖猶朝雲

側在昔と腰の圍いぬらん
身幅と違てあらん

風底に香飛て雙
袖舉。月前に杵怨
て兩眉低

風底香飛雙袖舉。月前杵怨兩眉低

風の底に衣の香飛て相對てう二人の袂かき
擧る月の明も前杵の音も怨も思あるも兩の眉低

年年の別思。秋
の雁に驚。夜夜の
幽聲。曉の鷄。到

年年別思驚秋雁夜夜幽聲到曉鷄

上と同じ章の内の句に夜も秋の雁の鳴るるが今年
小別思。此の秋の別思と驚るる年年の別思と云り夜
く衣を打幽る聲を曉雞のやうに思ふるの
中書王具平親王此詩を作してより世の文名高し

新勅撰
か衣を打幽る聲を曉雞のやうに思ふるの
月の清き夜を保せしに砧の音の聞るるが今宵の
月にまほぬ人ありうと空のしるし知りしるり

和漢朗詠集抄卷之三 終

和漢朗詠集抄卷之四

冬

初冬

十月江南天氣好。可憐冬景似春花

揚州江都縣の南湖。四十里揚子江の南を江。此邊他より白
暖かて冬を春の如く。面白と云意。冬十月の天氣也。まほぬ人ありうと云

冬をかくる春花の比の景色をいふ

四時零落三分減。萬物蹉跎過半周

四季の内が零落て三分減。又一分を殘草木の
外萬の物蹉跎と時を失て霜枯半に過て周々景色を蹉跎と云

床上卷收青竹簟。匣中開出白綿衣

床上の巻收青
竹の簟。匣中の開

良言固守
出す白綿の衣

暑くを避んとて床の上の設る青竹の冷氣の薄くを又か菅三郎
の巻を収る匣の中より白綿入一夜を中寒このよりの巻なる
糸をひかりぬすむるに可るをれぬのころり
後撰集よりみ人志すけ ありきすまハ降つ止つ定るに
時雨のこゝ初冬れもしれよるうりーるり

冬夜
一盞の寒燈、雲外
の夜、數盃の温耐、
雪中の春

冬夜

山居の雪夜、小本中丞と李給事と三人酒を酌する時、白氏の知、
一盞の寒燈、雲外の夜、數盃の温耐を飲て雪中
かぐ春のこちす

年光、自燈前、
向て盡、客思、唯
枕上從生

日光轉り年光のゆく年月日時過行ひるを年光と云々の傳故
を盡て木小のしと思ふ旅のほそぎのし心を生、客思ハ旅人の思
り此詩ハ冬の夜独起居くものちの題作しり

拾遺
ととひのいもづりもげさるの夜、河風もむさるるを
いも許すむハ妹のあまもけさと思ふ堪の女子の方通ふその路
川辺づゝひきて衛の声、風にこもひ來りこむた冬の夜

歳暮

歳暮
寒流、月を帶、
澄と鏡の如、夕吹霜
小和して利と刀似

寒流帶月、澄如鏡、夕吹和霜、利似刀

風雲、易向、人前、暮、歲月、難從、老底、還

風雲、人前、向て
暮、易、歲月、老底
從、還、難

見らちの年の暮る意、かて風雲、人の眼の前、これ湯と云
歲月ととの身も老、底より跡、還

古今
もく年のいしくもあつれは、まらふらん、つらむは、いふ、まらふ

良春道

萬物秋霜能壞色。四時冬日最凋年。

萬物秋霜能壞色。四時冬日最凋年。
萬物の物が秋の霜の色壞四季のうちに冬の日が最も物を凋すのうちに年まで凋す歳の晩の旅の望を作らん

閨寒夢驚或添孤婦之砧上山深感

閨寒夢驚或添孤婦之砧上山深感
淮南子青腰の王女霜を司る神なりとある此意を題する賦なり良人をも思いつ孤婦の夜をもちて独寝の閨の夢寒さるは砧の上の霜を置添と云夢驚は深山の霜のさるはして四皓の鬢髪白くするなりと心に徹し思ふ意を感動と作り史記に東袁公綺里季夏黃公申里先生とて四人の賢者秦の乱を避て南山に老て首皓り也四皓と云漢の高帝の時張良が謀して大を翼

先四皓之鬢邊

先四皓之鬢邊
紀納言

君子夜深聲不警老翁年晚鬢相驚

君子夜深聲不警老翁年晚鬢相驚
君子鶴と云謙鳥かすれ心緩か小人の性急るに異

聲聲已斷花亭鶴步步初驚葛履人

聲聲已斷花亭鶴步步初驚葛履人
遼城花草の鶴霜をいづる鳴る意を聲々已断と云月詩葛の履をいづる人が歩ふるさび履の冷々る霜の降るさ驚く夏葛かて組さる履をいづる皮の履を用る也詩に糾々葛履以て霜を履とあども魏の国俗冬も葛の履を用る

晨小瓦溝積鴛色變夜華表零鶴聲吞

晨積瓦溝鴛變色夜零華表鶴吞聲
晨の霜が瓦宇の水溝に置いて鴛鴦の形を作する瓦の色を變下白くする夜霜が遼城の華表朝の詩が零て、鶴が聲を吞で啼ぬ

雪

雪

天地陰を積で温る雪雨と

曉入梁王之苑。雪滿群山。夜登庾公之樓。小登也。月千里。小明月。

銀河沙漲三千界。梅嶺花排一萬株。

雪似鵝毛似似飛。散亂人。被鶴。髦立徘徊。被毛。被立。徘徊。

或逐風不返。如振群鶴之毛。亦當晴。猶殘。疑綴。衆狐之腋。

翅似得群。栖浦鶴。心應乘興。棹舟人。掉人。應。

曉入梁王之苑。雪滿群山。夜登庾公之樓。月明千里。謝觀。

白。武帝之御子。梁之孝王。云。河。苑。終。布。山。五。臺。山。名。高。山。在。築。山。象。群。山。朝。鄒。生。枚。叟。云。才子。將。雪。弄。故。群。山。作。庾。亮。字。元。規。南。樓。登。月。弄。人。之。其。樓。照。見。月。千里。

銀河沙漲三千界。梅嶺花排一萬株。白。雪。降。銀。河。沙。三。千。界。梅。嶺。花。排。一。萬。株。白。梅。後。雪。景。色。萬。株。梅。花。咲。み。れ。る。と。も。

雪似鵝毛似似飛。散亂人。被鶴。髦立徘徊。白。雪。の。降。鵝。の。毛。の。散。乱。て。飛。似。人。が。雪。中。に。徘徊。鶴。の。髦。を。被。て。立。て。徘徊。す。

或逐風不返。如振群鶴之毛。亦當晴。紀納言。春。雪。の。賦。り。浪。雪。風。を。飛。行。て。返。す。群。鶴。の。毛。を。振。か。せ。狐。の。腋。白。孟。嘗。君。狐。の。腋。の。皮。を。綴。狐。白。裘。を。製。是。と。着。す。は。万。病。と。く。も。愈。る。と。秦。の。昭。王。に。奉。り。此。故。事。を。晴。て。残。る。雪。を。人。を。多。く。の。狐。の。腋。を。綴。る。と。疑。え。る。

猶殘。疑綴。衆狐之腋。村。上。御。製。天。曆。の。帝。神。泉。苑。の。行。幸。小。雪。を。戲。覽。あ。つ。て。の。御。製。雪。降。と。は。浦。に。栖。鶴。の。數。添。て。群。る。と。思。え。る。其。興。淺。く。は。か。く。の。王。子。猷。雪。の。夜。舟。に。乗。て。安。道。を。尋。ひ。心。の。す。王。子。猷。山。陰。居。雪。天。に。降。る。に。眠。さ。ち。て。戸。を。ひ。ら。け。て。晴。る。月。あ。ら。ら。り。り。る。ま。の。ち。ま。ち。戴。安。道。を。刺。川。に。在。を。思。ひ。出。舟。掉。河。に。ひ。て。下。り。行。其。門。道。く。り。夜。も。明。る。至。り。て。歸。る。人。其。故。を。問。む。興。小。乘。じ。て。興。つ。け。歸。る。人。ぞ。安。道。に。ま。え。ん。や。世。説。蒙。求。等。小。出。

翅似得群。栖浦鶴。心應乘興。棹舟人。村。上。御。製。天。曆。の。帝。神。泉。苑。の。行。幸。小。雪。を。戲。覽。あ。つ。て。の。御。製。雪。降。と。は。浦。に。栖。鶴。の。數。添。て。群。る。と。思。え。る。其。興。淺。く。は。か。く。の。王。子。猷。雪。の。夜。舟。に。乗。て。安。道。を。尋。ひ。心。の。す。王。子。猷。山。陰。居。雪。天。に。降。る。に。眠。さ。ち。て。戸。を。ひ。ら。け。て。晴。る。月。あ。ら。ら。り。り。る。ま。の。ち。ま。ち。戴。安。道。を。刺。川。に。在。を。思。ひ。出。舟。掉。河。に。ひ。て。下。り。行。其。門。道。く。り。夜。も。明。る。至。り。て。歸。る。人。其。故。を。問。む。興。小。乘。じ。て。興。つ。け。歸。る。人。ぞ。安。道。に。ま。え。ん。や。世。説。蒙。求。等。小。出。

氷有

春氷

氷消て水を見れば
地より於多雪
霽て山峯望ハ盡
樓ハ入

氷消てハ漢主霸
を疑應雪盡てハ
梁王枚を召不

霜の性を疑ハ狐疑是ハ河の汀ハ聞水の聲ありハ氷薄
と知て渡す音ありハ厚と知て渡る水ハ氷より少ハ浪の音ありハ心
新撰万葉
まづその月影は光のこぼるる水に寒きに氷と月ハ陰精ありて水と一鯨

春氷

氷消見水多於地雪霽望山盡入樓

思黯と云人の別荘が南方にある早春こぼるる遊んては憶て作り
春の氷解庭ハ水の湛るる地より多く雪の雲霽て山を望む
景色はやくて云やりの詩ハ

氷消漢主應疑霸雪盡梁王不召枚

雪氷消する題ハ上の句ハ氷下の句ハ雪消る意ハ作しハ漢の
高祖より九世の後漢の光武皇帝と云時に王莽漢室を傾ナ光武ハ

南方に落行曲陽の滹沱河を渡んとす津の使ハ河水急に
して舟ハと衆皆驚る漢主王覇字ハ元白を召河をんせハ行て見
かつるる君臣驚んては恐も氷堅渡せと偽る主従ハ
河に至る此時天まは漢の天下を再興せん意ありハ氷厚く結とハ
渡て難ハ難を遁とて東漢記ハ出り今詩の意ハ氷消ハ
漢主光武王覇ハ語を疑ハハ漢の武帝の御子梁王雪の朝枚
叟を召て苑園に遊びのハ雪消てハ召

胡塞誰能全使節虎陀還恐失臣忠

是ハ上ハ雪下の氷の解を題ハ前の詩に似ハ漢の武帝相規
の時蕭武胡塞ハ使ハ匈奴を囚ハ食物を與ず海島に羊を養せ

武旃毛を雪に和ハ食ハ命を保ち十九年の後歸て使節を入
漢の帝の見ハ秋の部の歌ハ節ハ漢の使ハ旗印と云今詩の意ハ雪消
ハ誰ハ誰ハ胡地ハ使ハ勤ハ氷ハ解ハ虎陀ハ臣の忠ハ失ハ
後漢の王覇ハ偽者トハんを恐ハ前ハ詩ハ叙ハ塞ハハ昔ハ

氷消見水多於地雪霽望山盡入樓

十二月家くは佛名行き導師階れくわかて大ねて送り送へいそきわき
 かも師走と云ふこと今午はより來春はむく音身老とやるを何ぞ
 か急がらんといふ拾遺集にも出されど
 詞が除夜の詠いて佛名の意なり

拾遺
 年の中作罪も佛名の功德によりて雪のつりて消えゆく
 消滅せよとの意らん下知のらんといふこと

和漢朗詠集抄卷之四終

